

2018 国際ウエルディングショー 10万人が来場

日本溶接協会 オリジナルコミックを配布

「2018 国際ウエルディングショー」(日本溶接協会・産報出版主催)は、4月25日-28日までの4日間、東京・江東区の東京ビッグサイト東1-3ホールの全館を使用し開催され、会期中10万428人の来場者を記録した。

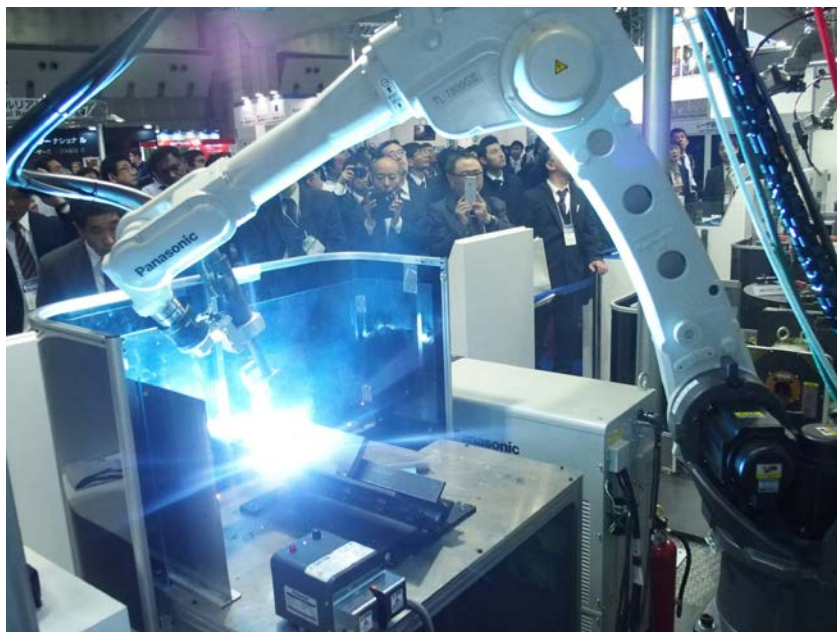
初日の開会式で栗飯原周二日本溶接協会会長は「溶接・接合技術の面白さ、力強さを産業界だけでなく、一般へもアピールする」と挨拶し、「ウエルディングショーはそれぞれの時代背景をテーマに、溶接技術の進歩を明確にしてきた。今回は技術発表やトレードショーとしての色彩に加えて、AIやIoT、人も含め溶接の未来の姿を考えるきっかけとなる」と期待を示した。続いて久木田裕産報出版社長は「今回は過去最大規模での開催となった。会場で新しい技術と情報が必ずみつかると述べた。



4日間で10万428人が来場

1969年の第1回から数えて25回目となる今回は「溶接接合技術がつなぐ—ものづくりと人づくり」をテーマに掲げ、出展社数は247社に及んだ。前回2014年の東京開催と比較して、出展社数で17%、展示面積で32%の増加となったほか、新規企業が出展社全体の34%を占めた。

会場内では国内外の有力メーカーが、新製品の展示や実演を行い、アークの音と光の競演が会場を彩った。溶接機分野では、電流波形やワイヤ送給制御により、溶接品質を向上させた最新機種や、ネットワーク化により、話題のIoT化の先陣を切る溶接ロボット、溶着効率や低スパッタ化が進む溶接材料、熱源の多様化が進む中、加工スピードと精度の向上を見せる切断機など、メーカー各社の新製品発表が相次いだ。



最新機種の実演に注目が集まった

●開幕講演、技能伝承プラザ

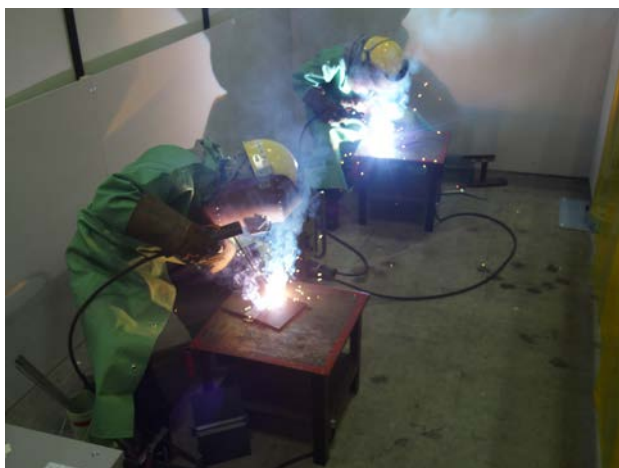
「今できないことを追いかけることが夢」——。初日に行われた基調講演は、北海道の町工場からロケット開発に挑戦し続けることで注目を集める、植松電機社長の植松努氏が「ものづくりと人づくり—思うは招く」と題し、集まった多くの受講者に向け力強いメッセージを送った。「子供の頃から紙飛行機が好きで、小学生のときに、子供向けに書かれた飛行機的设计指南書の内容を全て覚えた」という植松氏。ロケット打ち上げの様子などを動画で紹介し「エンジンの製作から始まり、機体や人工衛星の開発、実験施設の建造と、『ないものは自ら作る』ことを繰り返し、徐々に事業の幅を広げていった」と説明。現在は「JAXA との繋がりもでき、憧れだった毛利衛宇宙飛行士とも仕事をすることができた」と「失敗を恐れず、諦めないこと」の大切さを訴えた。

会期中に常設された「技能伝承プラザ」では、「溶接はおもしろい」をテーマに掲げ、熟練溶接士による実演やトークイベント、高校生溶接コンクールを通じて溶接の魅力を発信した。同プラザの初日には、「溶接女子に話を聞こう」と題し、日立製作所インダストリアルプロダクツビジネスユニット（茨城県土浦市）の女性溶接士・荒井美紅さん、金澤遥さんによる溶接の実演とトークコーナーを企画。溶接との出会いや、仕事のやりがいなどを聞いた。会期2日目は日本溶接構造専門学校の生徒と講師による溶接実演・体験コーナー、3日目は熟練技能者による

高校生競技課題の実演と解説を行った。最終日は、第9回関東甲信越高校生溶接コンクール（主催＝東部地区溶接協会連絡会／共催＝日本溶接協会東部地区溶接技術検定委員会）を開催し、同連絡会を構成する11溶接協会から推薦された22人の高校生がA-2Fを課題に技能を競った。

この他併載行事として、毎回恒例の5大フォーラム（レーザ加工、鉄骨加工、スマートプロセス、コーティング、非破壊検査）、出展社によるプレゼンテーションを中心とするトレンドセミナーが企画された。

溶接学会、日本溶接協会、産報出版の共同主催による第7回溶接連合講演会では、「現場のものづくり力とコストダウン」をテーマとした講演や、「未来体感ブース」として、バーチャル溶接シミュレーターを出展する3社による溶接体験コーナーを設け、多くの来場者で賑わった。同時開催の行事では、18年度溶接学会春季全国大会や、日本を含めアジア各国の溶接団体が加盟するアジア溶接連盟（AWF）交流会が開催され、国内外からの溶接研究者、関係者が一堂に会した。



溶接女子2名による実演



第9回関東甲信越高校生溶接コンクール

●新技術・製品の競演

国内溶接材料メーカーでは、神戸製鋼所は、ブース内を建築、自動車、造船などにテーマ別にエリア分けし、各種溶接材料と溶接ロボットを組み合わせた実演を行った。多層すみ肉溶接に適した鉄骨向けFCW溶接ワイヤを鉄骨天吊梁溶接ロボットと組み合わせた溶接システムを出展した。造船向け材料では、大組立溶接ロボットと専用ワイヤ「DW-100R」を組み合わせることで、水平すみ肉溶接での溶接性を維持しながらも、立向上進溶接の溶接速度向上につなげる新提案を実演とともにに行い注目を集めた。

日鐵住金溶接工業は、建築鉄骨向けに590MPa級ハイテン鋼用シームレスフラックス入りワイヤ「SX-60」を出展。高電流域でも安定した溶接性と、ソリッドワイヤと同様の溶込み深さが得られる点や、低スパッタ化による作業効率の向上などをアピールした。

溶接機では、ダイヘンは高能率アーク溶接システム「D-Arc」の進化版として「D-Arc 大電流MAGモード」を発表。25mm厚鋼板の下向すみ肉溶接を800アンペア超の電流域で行い、大脚長（20mm）溶接を実現した。パナソニックは、アーク溶接ロボットTAWERS「Super Active」の溶接性能をマルチマテリアルに展開し、軟鋼薄板のギャップ対応や、亜鉛めっき鋼板の低ス

パッタと低ブローホール技術などを紹介した。

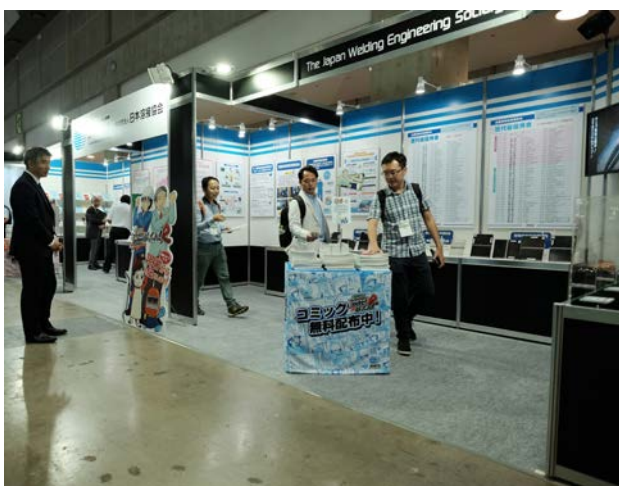
溶接ロボットではアーク溶接ロボットでダイヘン、パナソニック、神戸製鋼、安川電機、フアナック、愛知産業などが出展。抵抗溶接分野では不二越、安川、電元社トーア。切断分野では大出力ファイバーレーザー発振器を搭載した、日酸 TANAKA、小池酸素工業が最新機種を出展した。

レーザー溶接分野ではアマダ、トルンプ、パナソニック、マツモト機械などが、ロボット化とレーザーの高品質化による加工精度の向上を実演で紹介したほか、「SIP：次世代型レーザーコーティングプロジェクト」のブースでは、大阪大学接合科学研究所をはじめ、プロジェクト参画企業が集結し、取り組みを紹介した。

●日溶協オリジナルコミックが好評

日本溶接協会は、オリジナルの新刊コミック「浪速博士の溶接がってん R」と「溶接レポートマンガー現場からお伝えします」の最新刊を会場でそれぞれ無料配布。溶接界のアピールとイメージアップに努めた。「溶接がってん」は第4・5巻、「現場からお伝えします」は第2巻の発行となった。「現場からお伝えします」は建設現場での溶接技術などをテーマに、工場内での鉄骨製作から、高層ビルでの現場溶接での溶接組立までをわかりやすく解説したものの他、造船所や建設機械製作工場での溶接、ろう付、美術工芸品の溶接、大阪大学接合科学研究所の見学とバラエティに富んだ内容となっている。

このほかブースでは溶接関連資格の紹介や、日溶協が運営する「溶接女子会」ホームページなどを、パネルとともに展示し、多くの来場者が訪れた。



日本溶接協会ブース



コミック表紙

*コミック冊子の無料配布は既に終了しております。「[浪速博士の溶接がってん R](#)」および「[溶接レポートマンガー現場からお伝えします](#)」は、日本溶接協会ホームページでご覧いただけます。